

# 日本人学生のフランス語運用能力

——語彙不足の弊害——（その3）

中村 敦子

## 序

「言葉は単に形式化された体系とか抽象的な現実を論理的に構造化した総体というだけのものではない。言葉はまた（まず何よりも）社会的営為であり、言い換えれば、言葉を使う人々と切り離すことのできないものなのだ」<sup>1)</sup>（下線筆者）。外国語によるコミュニケーション行為は、その言語を母語として使う人々が暮らす社会と、そこに深く根ざす様々な文化事象を基盤に成り立っている。

すでに前稿<sup>2)</sup>で述べたように、我々は発話文の語彙に着眼し、語の意味内容 *signifié* を介して伝えられるコミュニケーション行為の異文化要因に注目した。この要因を具体的には、〈実践知識〉 *savoir* または〈実践術〉 *savoir-faire* として捉え、これらを習得していることがコミュニケーションに必要とされる社会・文化知識運用能力 *compétence socioculturelle* の獲得につながり、さらにコミュニケーション能力 *compétence de communication* そのものの形成へとつながることを指摘した。本稿では、前稿の〈実践知識〉の例に引き続き、〈実践術〉の例を取り上げ、日本人大学生の語彙力に焦点をあてて、彼らのフランス語運用能力の問題点を今一度明らかにしたい。初めにフランスと日本とでは異なる社会的、文化的〈実践術〉に注目し、次に日本の社会、文化に見られないフランスに特有の〈実践術〉を対象にして、日本人学生<sup>3)</sup>がどの程度の知識を得ているかを調べていくことにする。

## 1. 日仏で異なる社会・文化〈実践術〉

同じ社会的営為を取り上げても、フランスの社会、文化に根ざす〈実践術〉と日本の社会、文化の上に成り立つそれとはなかなか一致をみない。これはフランス人と日本人のそれぞれがよりどころとする社会的、文化的

背景が異なるからであろう。以下に日仏で異なるコミュニケーションに伴う〈実践術〉の例を取り上げ、学生たちがこの違いをどの程度認識しているかを見ていこう。

#### a. 書類の記入

何らかの手続きをする場合、用紙を渡され、必要とされる情報を記入することは、フランスでも日本でも同じである。氏名、生年月日など、書き込む内容にとくに違いがなくても、その記入の仕方が日本のそれと異なることに注意してみよう。

日本人は氏名をアルファベットで書く場合、英語教育で習ったことが正式だと思い込み、フランスに提出する書類でも名を姓に先立たせて書いてしまう。ところがフランスでは姓を初めに大文字で書くのが正式とされている。姓を先立たせるという点では日本と同じになる。しかしフランスでは、出生時の姓が生涯にわたって重要である。女性が結婚してその姓を夫の姓に改めても、「Pour les femmes, nom de jeune fille」という表現が示すように、書類で要求されるのは出生時の姓を記すことである。したがって旧姓を最初に書き、結婚後の姓は「Épouse ~」として旧姓の次に書き添えるだけになる。

«nom» という単語一つをとっても、その和訳となる「姓」という日本語からは必ずしも伝わらない、フランスの社会、文化の上に成り立ったコミュニケーション行為の一面が隠されている。あたかも日本とフランスに共通のこのように思われる「氏名」という概念も、コミュニケーションレベルで捉えれば、それは一つの異文化現象を伝えるものなのである。

別の例を見てみよう。学生はフランス語の記入用紙でよく使われる«Cochez la(les) case(s) correspondante(s).» という表現についてどの程度知っているだろうか。この表現は、「該当する欄に丸印をつけよ。」(下線筆者) という日本語の表現とは異なるフランス式の記入の仕方を求めている。なぜならこの表現のキーワードとなる«cocher」とは、該当する欄に○印ではなく、×印をつけることだからである。すなわち、よく使われるもう一つの表現である«Mettre une croix dans la(les) case(s) correspondante(s).» (同) で指示されている«croix» がフランス式の記入では重要であり、このことをきちんと把握していなければならない。アンケートの対象となった7人の大学院生のうち2人だけが、この«cocher»を正しく実践できていたが、残りの5人は×印ではなく日本人がよく使う✓印を用いて記入して

いた。ここで注意を喚起しておきたいのは、日本人にとって否定的な意味合いをもつ×印 «croix» が、フランス人には肯定的な記号になっていることである。

このような日仏間の文化的な違いは、次の表現 «Rayer la(les) mention(s) inutile(s).» でも明らかであろう。これは「該当しない項目に線を引いて消す」(下線筆者)というフランス式の記入の仕方を要求されているのであって、「該当する項目を丸で囲む」(同)日本式の記入の仕方とまったく異なる。ここでキーワードとなる «rayer» の意味内容を学生たちはどのように捉えているだろうか。学生の解答例を次に示しておこう。

- (1) ~~M.~~ Mme ~~Mlle~~                      (2) ~~M.~~ ~~Mme~~ Mlle
- (3) M. Mme Mlle                              (4) M. Mme (Mlle)

(1) と (2) では «rayer» の「消す」という意味は理解されている。しかし(1) ではその消し方がフランス式ではない。すでに見たように、フランス人にとってむしろ肯定的な意味を持つ×印を用いているからである。また(2) では、フランス式に消してはいるものの、不安が残るためか Mlle に下線を引いている。(3) と (4) では «rayer» の意味を捉えておらず、日本式に該当項目に印をつけている。解答してもらった7人の学生のうち正しくフランス式に記入できたのは2人だけであった。「rayer」という語の意味だけでなく、その意味内容が要求しているフランスに特有の実践術 *savoir-faire* を習得していないことがわかる。

ところで以上の記入例に見られるずれは、コミュニケーションの上で重大な障害を引き起こすことはないかもしれない。しかし次のような記入例ではどうであろうか。

« Fait à \_\_\_\_\_, le \_\_\_\_\_  
Signature précédée de la mention «Lu et approuvé» »

フランスで書類に記入する際、一番重要とされるのが自筆のサインであることは言うまでもないが、契約を扱った書類では、その内容が有効なものとして認められるためには、自筆のサインだけでなく、「Lu et approuvé」という表現をサインの前または上部に書き添えなければならない。つ

まり契約の内容をきちんと読み、同意した旨を記す必要があるからである。アンケートの対象となった学生には、外国人学生のための健康保険加入用紙を読んでもらい、上記の箇所に記入してもらった。しかしサインの前にこの表現を書き添えた学生は1人もいなかった。「lu」あるいは「approuvé」という語そのものは知っていても、この表現が何を意味するのか、ここで何を求められているのかわかっていなかったからであろう。

同じく「Fait à \_\_\_\_\_」の箇所では、ここに何を書き込んでよいのかわからない学生が7人中4人いた。日本の書類では署名捺印した場所を特に書き記す習慣はないので、「fait」「à」というフランス語そのものは難しくなくとも、日本人の学生にはここで何を書き入れたらよいのかわからない。このことは動詞 *faire* とその過去分詞 *fait* を習得させるだけではコミュニケーション能力の養成にはつながらないことを示している。「fait à」のような表現を取り上げて、日仏の社会的、文化的な違いに触れながら、「fait à」に対しどのような答えが求められているのかを説明しなければならないのである。

以上扱ったような表現に対し、正しく応答できれば、それはそれぞれのフランス語の意味内容に含まれるフランスの社会的、文化的要因をきちんと捉えた上でフランス語がわかっているということであり、外国語でのコミュニケーションに必要とされる社会・文化知識運用能力を身につけていると言えるであろう。

## b. 氏名の綴り字

外国語による電話でのやりとりでは、ジェスチャーで伝えることも顔の表情などで理解してもらえないこともないため、コミュニケーション行為を成功させるのがなかなか容易ではない。なにも電話など使わずに相手の面前で直接話せばいいことだが、しかしフランスに旅行で滞在すれば、たとえ流暢にフランス語が話せなくとも、電話による連絡が便利なおあるだろう。たとえばホテルに予約を入れるとか、帰国便の確認電話をかけなければならなかったりする。この時に特に重要なのが氏名を正確に伝えることである。フランス人に馴染みのない日本人の氏名であるだけに、それを伝えるには「épeler」という言語行為に頼らなければならない。これは書類に氏名を記入するのはまた別の実践の仕方を求められる。

日本人は氏名を伝える場合に、使用する漢字を明示しなければならないことがある。しかし特にその伝え方に決まりがあるわけではない。とこ

ろがフランス語で氏名の綴りを伝えるには、単にアルファベットを並べれば済むというものではない。電話を手段にしている以上、アルファベットの音一つであっても、むしろ一つの音素であるからこそ、発信者側が正確に発音しなければ、受信者側のフランス人に聞き取ってもらえるはずがないであろう。フランス人同士のやりとりであっても、絶対に聞き違いが起これないというわけではない。そのための «épeler» なのである。

学生に次の質問にフランス語で答えてもらった。

«Vous pouvez épeler votre nom, s'il vous plaît?»

この質問に対し、フランス人が使う綴り字の伝え方を正確に用いて答えた学生は 101 人中 1 人もいなかった。しかも 101 人中半数以上の 57 人までが無解答であり、「épeler」という単語そのものを知らなかった。33 人の学生が «épeler» の語を理解していたが、単に「綴り字を言う」という意味の把握に留まり、彼らの大部分が、「N-A-K-A-M-U-R-A」とただ氏名をアルファベットで記入するだけの解答であった。この 33 人のうち 8 人の学生が、「A comme Anatole, B comme Berthe, C comme Catherine...」という綴り字を伝えるための形式を知っていた。しかし彼らの解答はフランス人の実践の仕方に適うものではなかった。すなわち *comme* の次にフランス人の名前を単語として使っていなかったのである。アルファベットの A を伝えるためには、単語の頭文字が A であればどんな単語でもよいと考えていたためか、解答は次のようなものであった。

«A comme Angers, Afrique, Allemagne, amour,  
U comme urgent,  
I comme Indonésie,  
M comme Marseille,  
T comme Tours.»

«épeler» は、日本人の学生がコミュニケーション行為に含まれるフランスの社会的、文化的実践術を身につけていないことを示す一つの例である。

### c. 公共交通機関

日本とフランスの交通機関を比較した場合、交通手段そのものが大きく違うということはない。しかし交通機関の利用の仕方はどうか。学生に次の文の意味を説明してもらった。

« Pour être valable, ce billet doit être composté lors de l'accès au train.»

これはフランス国有鉄道 SNCF の乗車券に印刷されている文である。日本と異なり、フランスの鉄道の駅では列車のホームに改札口を設けていない。乗客のみならず見送りの人も迎えの人もホームに自由に出入りできる仕組みになっている。改札口がないため、乗車券さえ持っていれば列車に乗れるように思うが、実は乗車する前に必ず「composter」という行為を実践しなければならない。ホーム付近にいくつも並んでいるオレンジ色の機械「composteur」で乗車券に改札印を打たなければ、有効な乗車券で列車に乗車していると見なされない。

109 人の学生のうち 15 人だけがこのフランスの改札の仕組みを理解していた。この 15 人のうち 14 人までが滞仏経験者であった。56 人が無解答であったが、中には単純に日本の仕組みをそのまま当てはめて解釈している学生がいた。日仏で仕組みが異なるということを考えなかったのだろうか。上記の文では、たとえかなりの語学力を身につけていても、肝心の「composter」の社会的、文化的な意味内容を捉えていなければ、文全体を正しく解釈できない。

ここでもう一つ「être valable」という表現に注意してみよう。日本では定期券であれ切符であれ、改札口を通過できるものであれば、法的に有効な乗車券と見なされる。たとえ降車駅までの料金が未払いであっても、車内または降車の際に精算すれば不正乗車にならない。フランスでは法的に有効な乗車券をどのように定義しているのだろうか。パリの地下鉄で目にする注意書きを見てみよう。

« Conservez votre billet jusqu'à la sortie.

Inscrivez le numéro de votre carte orange sur le coupon mensuel.

Votre titre de transport peut être contrôlé en voiture, en station.

(1) Ne vous mettez pas en situation irrégulière.

(2) Vous auriez à payer immédiatement une indemnité forfaitaire.»

パリの地下鉄、R.E.R.では精算のシステムがないので、行き先までの切符を買って乗車しなければならない。しかし降車駅の出口は、切符なしでも出られる駅があり、そのために乗車の際に自動改札の回転バー「tourniquet」を飛び越えて無賃乗車する客がいる。このような不正乗車を摘発するために、時々パリ交通公団 RATP は検札「contrôle」を行なう。「出口まで自分の切符を持ってください。」と注意を促すのも、この検札の際に無賃乗客の「途中でなくした」などという言い訳が正当理由にならないことを明示しておくためであろう。

パリ交通公団の定期券 «carte orange» は、月曜から日曜まで有効の一週間切符 «coupon hebdomadaire» と、1日から31日まで有効の一カ月切符 «coupon mensuel» がある。パリ市内と近郊は、距離によって5区域 «zone» に分かれている。利用する区域を指定して切符を買うが、その区域内であれば自由に乗り降りできる。

ところで «carte orange» の切符は日本の定期券と異なり、使用前に «valider» つまり乗車券を法的に有効なものにするという約束事がある。具体的には、切符を収める台紙に利用者の顔写真を貼り、自筆のサインをする。同時に新しく買い求めた切符 «coupon» にこの台紙に印刷されている番号を必ず記入する。検札の際に、切符に記入された番号と台紙の番号を照合し、顔写真で利用者本人のものであるかどうか確認される。「Inscrivez le numéro de votre carte orange sur le coupon mensuel.」という記述は、フランス社会で求められる «valider» という行為を具体的に示しており、これを怠れば不正乗車と見なされ、即罰金の対象になる。

学生に上記 (1) と (2) それぞれの文が伝える内容を書いてもらったが、(1) は 109 人中 10 人、(2) は 14 人しかその内容を汲み取れなかった。ここでは «en situation irrégulière» という表現が内容解読の鍵となるが、不正な状況であることを単語の上で察していても、フランスの仕組みを具体的に知らないために正しく説明できない。日仏のこの違いを捉えていない学生の中には、日本の仕組みをそのまま持ち込んで解釈してしまう学生がいる。「行き先まで切符を買っていないので精算しなければならない。」といった解答が、間違った解釈をしている 61 人中 14 人いた。

社会的、文化的準拠の内容が母語のそれしか持たない学習者には、外国語であるフランス語の文を正確に読み取ることは難しい。仏和辞典の日本語訳だけを頼っていては把握できないフランスの社会的、文化的な意味の領域が常に潜在するからである。この領域を顕在化することは、コミュニケーションに伴う異文化要因を明示することにつながり、それだけフランス語の世界に近づけることになる。

#### d. 町

大都会は国が変わっても、都会人の行動パターンや抱える社会問題にどこか共通点があるものだ。しかし町の構造の特性やその機能の仕方は異なっている。たとえば西洋の町と東京のような日本の町とでは空間の分割の仕方が大きく異なるため、住所の表記の仕方が違い、その住所に基づく

道捜しも同じようにはいかない。ロラン・バルトは東京の町について次のように語っている。

「東京の町の通りには名前がついていない。文字で書かれた住所は確かに在るのだが、それは単に郵便配達用の価値しか持たない。土地台帳に準拠して（地区及び区画ごとになっていて少しも幾何学的でない）、郵便配達人にはわかるが訪ねて行くとする人にはわからない。この世界一の大都市は、実践的に整理されていないし、町を構成する細かい空間に名前がついていないのだ。[...] しかしながら東京は合理的ということが、数ある仕組みの中の一つにすぎないということを我々に繰り返し伝えてくる。」<sup>4)</sup>

西洋の町に慣れ親しんだ者にとって、東京の町で指定された場所に到達することはきわめて難しいことのように感じられるかもしれない。

しかしロラン・バルトが感心するように、日本人は紙切れを出して駅などの誰でもわかるところを目印に自宅の方角を即座に描いてみせるということにたけている<sup>5)</sup>。たとえ通りに名前がなくとも来訪者に住まいの場所と道順を伝える術を身につけている。それはフランス人からみれば、日本人に固有の文化的な実践術なのである。

東京のような雑然とした町のたたずまいに慣れた日本人には、整然としたフランスの町並は実に美しく見えるものである。そこでは町の機能をささえる重要な建物が人々の目を引く。鉢植えの花がきれいに咲きそろう、どこか華やかな雰囲気をかもし出している市役所 «maire» や市庁舎 «hôtel de ville» と、その前に広がる大きな広場 «esplanade」。様々な様式の教会 «église» とその前の広場 «parvis», あるいは三色旗 «drapeau tricolore» の翻る公立学校などは視覚的に捉えたフランスの町の特徴であるが、これらはまたいわゆる道案内の時の道標にもなるのである。

さらにフランスの町の通りにはすべて名前 «nom de la rue» がついている。建物の門構えの上部に番地 «numéro» が記され、通りの片側には偶数番地 «pair» の建物や家々が並び、もう一方には奇数番地 «impair» が連なる。大都市パリであれば、市が20の区 «20 arrondissements» から成り立っていて、1区がパリの中心に位置し、20区まで時計回りの渦巻き型に割り振られている。パリで目的地に到達するには、東京の町と異なる特徴を実践的に把握していなければならないが、この特徴とは上記に示したようなフランス語に託されているのである。



大学院生にパリの不動産案内の記事を読んでもらい質問に答えてもらった。この種の記事では、物件が何区の何通りにあるかを最初に明示してある。「15<sup>e</sup>. Rue de la Vouillé」となっていれば、物件がパリ市 15 区の Vouillé 通りにあることが読み取れなければならない。大学院生の中にはこのような記事に読み慣れていないためか、通りの名の前に記された「15<sup>e</sup>」をパリの区ではなく、アパートマンのあるフロアの数字と混同している学生が 6 人中 2 人いた。

また「14<sup>e</sup>. 79, Rue Daguerre」で始まる売りマンションの案内記事を読んでもらい、このアパートマンの在る建物のおおよその位置をこの地区の地図の上に記入してもらった。その結果、正しく奇数番地側の通りに印をつけた学生は 6 人中 4 人で、2 人の学生は通りの片側が偶数番地 «pair» でもう一方が奇数番地 «impair» になっていることを知らなかった。

上に列挙したような単語を習得していなければ、不動産記事を読んだり、物件の下見のため現場に赴くといった、部屋探しに伴うコミュニケーション行為で求められる実践的な場面を切り抜けるに足るフランス語運用能力を身につけているとは言い難いのである。

### e. 住居

現代は異文化の受容あるいは異文化への同化といった文化変容 *acculturation* の避けられない時代である。日本人の暮らしにもこの変容が起きており、テーブルに腰掛けて食事をとり、ベッドに寝るといった生活様式に変わってきた。それに伴い住まいそのものも大きく変化してきている。伝統的な日本の家屋では、一部屋を昼間は襖を開け放して居間として使い、夜になれば襖を閉めて寝室として使うことができた。ホールが、「空間を半固定化した構造」<sup>6)</sup> と呼んだこのような日本の住まいの特徴は次第に薄れ、今では寝室は個室として機能し、居間は家族団らんの場所として定着している。

この文化変容は何も日本文化だけに顕著なことではなく、フランス文化にも同じような現象が見られる。フランス人はベッドに寝るものと思っているかもしれないが、ベッドを置くスペースを考えれば、それだけ広めのアパートマンが必要になり、当然それだけ高い家賃を払わなければならなくなる。パリのような住宅事情の厳しい所では、狭い居住面積を上手に活用できる家具が生まれてくる。昼間はソファとして使い、夜は床に敷いて布団のように使うマットレス «*banquette-lit*» もその一つであ

る。通販のカatalogで「futon」からインスピレーションを得て構想された「dormir à la japonaise」の寝具として紹介されているが、これは単なる異国趣味指向だけでなく、現代のパリジャンの生活形態に合っているからではないだろうか。

互いの文化が近づくような形でそれぞれの文化変容が起きているとはいえ、二文化間の差異は常に存在するものである。たとえば日本人は西洋的な鉄筋コンクリートの集合住宅に住むようになったが、各マンションには必ず靴を脱ぐための「玄関」がある。この日本式の玄関は少し高めに造られた居住部分と区別されている。この点でフランスのアパルトマンに見られる「entrée」と異なる。フランスの集合住宅の建物「immeuble」全体の構造も、日本のマンションの建物と細かなところで違いが見られる。建物の中に入るにはベル「sonnette」を押さないと門が開かない。夜間に限らず昼間でも建物の暗証番号「code」を押さないと門が開かない仕組みになっているところもある。門を入ると建物の外側からは見えない中庭「cour」がある。この中庭に面したアパルトマンはそれだけ閑静な環境にあるわけである。上の階に行くために階段や廊下の灯をつけるが、そのスイッチは「minuterie」と呼ばれ、数分後に自動的に灯が消える仕組みになっている。建物の中のアパルトマンの間取りは様々で、上の階には2階建て式のアパルトマン「duplex」があったり、最上階は屋根裏部屋「mansarde」になっている。地階にはワインなどを貯蔵できる地下室「cave」が設けられている建物もある。アパルトマンの入り口に立つと、マット「paillasson」が敷いてある。靴底を拭くためである。日本では昔、牛乳箱に鍵を隠して外出したものだが、フランスではこの「paillasson」の下に鍵を隠したものらしい。

このような建物の構造的、機能的な違いだけでなく、アパルトマンの間取りの捉え方も日仏で異なっている。日本ではリビングとダイニング・キッチンに寝室が2部屋あるマンションを「2LDK」と呼んでいる。フランスでは部屋の機能を表現せずに、部屋の数だけを伝える。したがって「trois pièces」と言った場合、日本式に当てはめれば「2LDK」もしくは「3DK」になる。この違いを心得ていないと、「3LDK」「4LDK」という表現に馴染みのある日本人は数字だけに注意して、「trois pièces」を「3LDK」と、実際よりも1部屋多いアパルトマンを想定してしまう可能性がある。

大学院生に不動産案内の記事を読んでもらい、「trois pièces」を日本式

に書いてもらったが、6人中3人が無難に「3DK」と解答したが、「2LDK」と答えた学生は1人もいなかった。1人の学生が「3LDK」と答えており、上記で述べたように間違って解釈していた。もう1人は「2DK」と書き、1人の学生は解答できなかった。フランス語を正しく解釈できるだけの日仏の社会的、文化的な差異を十分に認識しているとは言えない結果である。

#### f. 食品の単位

文化の違いが大きく現れるものの一つは、食生活である。伝統的に魚を食べてきた日本人は魚一匹を何も捨てずに調理することを知っている。魚に対してはそれほど執着しないフランス人も、豚を扱うとなると何も残さずに食する術を知っている。日仏で食べ物が伝統的に異なるのは言うまでもないことだが、同じ食材を取り上げてもその調理法が異なるため、たとえば魚や肉などの扱い方一つにも相違点が見られる。

調理法と関係の深いこの両食材の単位レベルに注目してみよう。フランスで魚屋に行って、日本の「切り身」を買おうとしても見つからない。フランスでは魚を日本式の「切り身」単位で調理しないからである。その代わりに«darne»というフランス語に出会う。「切り身」は、魚を三枚または二枚におろして片身を少しずつ切り分けたものだが、「darne」は魚を丸ごと輪切りにした一切れをさす。

ところでフランスの魚屋には「切り身」はみつからなくとも、すぐに刺身にできそうな三枚におろして皮をとった魚の片身が何種類も店先に並んでいる。これを«filet」と呼ぶ。刺身にするには鮮度の問題があるが、もちろん魚を刺身として食べる習慣のないフランス人にとって、これは生食用ではない。普通、バター焼きやムニエルに調理する。

日本人がフランスの魚屋で魚を買う場合、丸ごと一匹買って調理するのであれば、「darne」とか«filet」という単位で買うことになる。このような語は日本と異なるフランスの食文化の一面を具体的に表わすだけでなく、フランス語によるコミュニケーションに伴う異文化要因の一つとして捉えることができる。

アンケートの対象になった大学生に、レストランの定食コースのメイン料理として魚料理を選んでもらった。Filet de cabillaud sauce cressonnette / Marmite de rognons de veau à la moutarde de Meaux / Épaule d'agneau rôtie à la fleur de thym / Contrefilet poêlé gratin

dauphinois の四つの中から «filet de cabillaud» を選べた学生は 101 人中 45 人であった。半数以上が、魚料理を選ばなかったことになる。

次に同じ食材の単位としてハムを取り上げてみよう。学生に「ハムを二枚ください。」という表現をフランス語で書いてもらった。ここでは「二枚」という表現が重要なのだが、「Deux tranches de jambon, s'il vous plaît.」と正しく書けた学生は、101 人中 14 人だけであった。このうち 12 人はフランス滞在を経験した学生である。「Deux jambons」と解答した学生が 17 人おり、「Un jambon」と「Une tranche de jambon」の違いを捉えていない。フランス語で言う「jambon」は豚の腿肉をそのまま使って作った大きな塊を表し、肉屋で買う場合、必要な枚数をスライスしてもらう。その一枚が「tranche」である。したがって「Un jambon, s'il vous plaît.」と言えば「この腿の塊を丸ごと一つください。」ということになってしまう。フランス人の肉屋は、日本人が「Deux jambons」と言うのを聞けば、その内容を確認するであろう。彼なりに量を想定して、たとえば「Deux kilos?」と聞き返してくるかもしれない。「tranche」を知らないために、その後のフランス人肉屋とのやりとりがスムーズにいかどうか危ぶまれる。日本では肉屋で売っているハムは普通加工品であり、スライスした一枚が小さく、100 グラム単位で買う。そのために日本人の学生は「ハムを二枚ください。」と言う時の「二枚」という表現に戸惑ったのではないだろうか。実際、この問題では 101 人中 41 人までが解答欄に何も書いていなかった。「二枚」をどのように言ったらよいのか分からなかったのであろう。解答に «pièce» を用いて答えた学生 (14 人) もいた。まさにこのようなコミュニケーションの発話文に、異文化要因の一つが潜んでいるのである。

こうした食材の単位では、冠詞や数詞をつけるだけでは必要とする量を明確に対話者であるフランス人に伝えられないことがある。日仏両文化に共通する食材であっても、加工の仕方や切り分け方が異なる。またある量にまとめられて店頭に並ぶ食品も、一つの単位として捉えた場合、日仏で異なることがある。たとえば 1 リットルの牛乳が日本では細長い直方体のパックに入っているが、フランスでは伝統的なあの太い牛乳ビンに代わって、レンガの形に近い直方体のパックに入っているものが最近は多く出回っている。これを «une brique de lait」と呼んでいる。果物屋に行けばイチゴはグラム単位で買っても、ラズベリーは 8×12 ㌘ ほどの小箱の単位で買うが、これが «une barquette de framboises» である。

このような食材や食品の単位を表わすフランス語の知識は、市場などでの買物で求められるコミュニケーション行為に伴う異文化要因の一つである。

### g. 支払い

フランスで買物をして支払いの時になると、またそこで文化的な相違点に出会う。スーパーでは日本と同じような仕組みで、レジに品物を持って行き、そこで会計を済ませる。しかし、デパートなどでは次のように言われる。「Vous réglez à la caisse.」

学生にこの発話文の意味をたずねたが、101人中39人しか正しく答えられなかった。フランスのデパートでは、店員とお客が直接金銭のやり取りをしない。買いたい品物を店員に知らせると、店員は用紙にその品物の値段を書き込み、それを客に渡し、「Vous réglez à la caisse.」と言う。客はレジに行き用紙を見せ会計を済ませた後、領収印のあるその用紙を店員に見せて、品物を受け取る。

上記の発話文はごく基礎的な構文で成り立っている。しかし日本のデパートでの買物場面しか想定できない日本人には、フランス人の店員がこの発話文で何を言おうとしているのか推測がつかないかもしれない。それだけに「régler」とか「caisse」という語を知っているか否かがこのコミュニケーション行為の鍵を握っている。言い換えれば、この二つの語は日本と異なるフランス社会の支払いというコミュニケーション行為における実践術を伝えてくれるものなのである。

さらに、レジに行くと今度は、「Vous réglez par chèque ou en espèces ?」と聞かれる。現金で支払えば済むと思っている日本人にとって、何を聞かれているか想像がつかだろうか。101人中55人の学生がこの発話文の意味をわかったが、日本人には支払いという行為で準拠するものがクレジットカードと現金しかないため、「chèque」というフランス語をクレジットカードと解釈した学生が23人いた。

日本でもカードによる支払いが少しずつ普及してきてはいるが、現金による支払いがまだまだ一般的である。フランスでは日本と異なり、小切手やカードによる支払いの方がむしろ定着している。実は「Vous réglez par chèque ou en espèces ?」という表現も今ではほとんど使われなくなった。フランスでは銀行、郵便局が共通に発行するキャッシュカード兼クレジットカードの「carte bleue」が急速に普及することによって、支払いの方法がカード、小切手、現金の三通りになった。そのために現在はレジ

で «Vous réglez comment ?» と聞かれるようになった。フランスでは現金以上に小切手やカードでの支払いが一般的であるために、このような発話文が存在する。フランス社会の仕組みを知らず、現金で払えば問題ないと思っている日本人の客には、わずか三語の文であっても、聞かれている内容を汲みとることは難しいであろう。

先に見たようにある発話文の存在そのものが異文化コミュニケーションの特徴を伝えることがあるが、それを構成する語は発話文以上に異文化要因の担い手となっている。「régler」あるいは «caisse» という語の意味内容には、単に「払う」とか「レジ」という日本語では伝わらない、フランス社会に固有のコミュニケーションに必要とされる実践の意味内容まで含まれているからである。

#### h. 評価

学業における成績の評価を取り上げた場合、日本とフランスの間にもどのような違いが見られるだろうか。学生に日本語の「百点満点」に相当するフランス語を書いてもらったが、「20 sur 20」と答えられた学生は、101人中3人（滞仏経験者）だけであった。他に «parfait» (11人) あるいは «excellent» (6人) といった解答も正しいが、「très bien» (4人) は正解にならない。20点満点で17点以上が «très bien» の評価になるからである。ちなみに16点から14点までの成績は «bien» と評価され、13点から11点までが «assez bien» となる。

ところで日本では100点満点で60点を合格の基準にしているが、フランスでは20点満点で半分の10点 «avoir la moyenne» を取れば合格となる。選抜試験ではない資格試験であるバカロレアに合格するにはこの «moyenne» の成績でよいわけである。

ではこの «moyenne» を日本の成績評価で使われる「可」と同価値のものとして捉えることができるだろうか。日本では、100点満点で70点以上が合格するに足る成績と見なされているところがあり、「可」の成績からはどこかぎりぎりで合格したという意味合いが伝わってくる。

フランス語で言う «moyenne» は必ずしもこのようなニュアンスを含むわけではなく、むしろ合格と評価するに足る成績であり、バカロレアにこの成績で合格する受験者の数も決して少なくない。そもそもバカロレアの試験では、assez bien の評価 «mention assez bien» であっても、実は «mention» がついていることで評価され、良い成績で合格した «reçu

avec mention» ことになる。その意味でも «moyenne» の成績を日本の「可」と同一視して、すれすれの合格を意味するものとして捉えるべきではないであろう。学生にこの «mention» の意味とその具体例を問うてみたが、101 人中 99 人がこの単語を知らなかった。「mention» の意味がとれなかったため、「très bien」などの評価の例を挙げることができた学生は結局 1 人（滞仏経験 1 年）だけであった。

異文化コミュニケーションの難しさは、たとえば次のような新聞記事の見出しの解読にもある。

(1) «Paris : 13 / 20 dès le premier tour»

Le Figaro, le 13 mai 1989

(2) «Vingt sur vingt pour Chirac»

Le Figaro, le 20 mai 1989

これはパリ市全 20 区の区長選挙の結果を伝えるル・フィガロ紙の見出しである。(1) は、第一回投票で早くもシラク派、少なくとも右派の区長 13 人が当選したことを知らせている。(2) は、第二回目の決戦投票の結果、「シラクが 20 点満点」を獲得したという表現を用いて、パリ市長であるシラクと同じ右派の政党に属する区長が 20 の各区で全員当選し、シラクがパリ市の行政をすすめるうえで非常に都合の良い選挙結果であったことを伝えている。

ここには明らかに日本人に共有されていないフランスの社会的、文化的要因が暗に、しかも二重に含まれていることに気付くであろう。仏和辞書だけを頼りに «Vingt sur vingt pour Chirac» をなかなか解読できないとすれば、それはこの社会的、文化的要因が掴めていないからである。コミュニケーションを目指すフランス語教育は、このような異文化要因をおざりにはできないのである。

#### i. 医師

フランス滞在中に体の具合が悪くなって医者にかかる場合、やはり実践的なフランス語を身につけていなければならない。こういったフランス語力を調べるために、大学院生を対象に、具合の悪いところや症状などを表すフランス語文を提示し、診察を受けるべき適切な医師を示すフランス語を選んでもらった。フランス語の文に使われている «grippe», «problème de peau», «femme», «bébé», «attendre un enfant」といった表現がヒントになるはずだが、医者 の 名称 を 表わす 単語 を 正しく 選べない 学生 が 多かつ

た。大学院生であってもこの種の語彙にほとんど触れてこなかったためであろうか。結果は次のようになった。

chirurgien-dentiste	6人中	5人*
ophtalmologue		3人
généraliste		2人
gynécologue		1人
dermatologue		0人
pédiatre		0人
oto-rhino-laryngologiste		0人
obstétricien		0人

※1人の学生がこの問題のすべてに解答していなかった。

従来大学で使われてきた語学教材では「médecin」あるいは「dentiste」といった単語を扱えば充分とされている。しかしフランスでの実際のコミュニケーション場面で、「Je cherche un médecin.」または「Je voudrais voir un médecin.」と言えば、相手が知り合いのフランス人であれば、病院の受付であれ「Quel médecin voulez-vous voir ?」(下線筆者)と聞き返されるであろう。「médecin」という語は上位概念語 hyperonyme であって、医者 の 総称 に すぎ ない。したがって実際のコミュニケーション場面で必要とされるのは、「médecin」の下位概念語 hyponyme なのである。

またフランスの医療システムをある程度知っていることが求められる。日本と異なりフランスでは一般医「généraliste」と専門医「spécialiste」の区別があり、この二つを「médecin」の下位概念語として捉えることができる。一般医は日本の内科医のようなもので、風邪の時に診察を受けたり、どの専門医に見てもらえばよいかの処方をしてくれる。専門医は、「spécialiste」と言うだけでは不明瞭であり、その下位概念語である眼科医「ophtalmologue」、皮膚科医「dermatologue」、小児科医「pédiatre」、耳鼻咽喉科医「oto-rhino-laryngologiste」、婦人科医「gynécologue」、産科医「obstétricien」といった単語を知らなければならないであろう。ここで気付いたかもしれないが、フランスでは婦人科医と産科医はそれぞれ一つの専門医として成り立っている。日本では産婦人科医として機能しているが、日本の医者はこのように二つの専門分野の診察を一人で行なうことが



よくある。内科医は小児科医を兼ねていることが多く、皮膚科医が泌尿器科医を兼ねていることもある。フランスの医者は一つの専門で診療所を開院する。一般医は専門医を兼ねることはできないし、専門医は一般医としての資格を得ていなければならないが、だからといって一般医も兼ねて診察をすることはない。

このように日本とフランスにおける医療システムの違いは、まず医師の名称を表わす語を通して読み取ることができる。フランス語のこれらの名称を知っていることは、異文化としてのフランスの医療システムの特徴を少しは理解していることであり、また実際のコミュニケーション場面で必要とされる実践術を多少とも身につけていることになる。

以上、いくつかの社会的営為を例にとり、コミュニケーション行為に現れる日仏の社会的、文化的相違点をフランス語の語彙を通してみてきた。異文化コミュニケーションを難なく図りうる第一歩は、語彙の習得によってこのような違いを把握していることにあるだろう。

## 2. 日本にないフランスの社会・文化〈実践術〉

異文化要因の一つは同じ社会的営為でありながら二国間に潜在的あるいは顕在的に存在する社会的、文化的な差異にあることはすでにみた通りである。ところで、もしある社会的営為が二つの社会、文化のうち一方にしかないとすれば、それを持たないもう一方の人々にとって、異文化コミュニケーションの壁はより一層厚いものとなる。日本人学生は、日本の社会、文化に準拠するものがないフランスの社会的営為の実践術をどの程度捉えているだろうか。以下にいくつか例を取り、調べていくことにする。

### a. レストラン

フランスは世界でも名だたる美食の国であり、日本人がその料理を楽しむ味わいたいと願うのも当然であろう。しかしこの楽しみも、フランスのレストランに特有の〈実践術〉を身につけていなければ台無しになってしまう。確かにフランス語を習ってきた者であれば、どこかしらでレストランでの会話を多少とも勉強してきてはいるだろうが、果たして習得したフランス語がどこまでフランスのレストランの特徴を伝えてくれるものであろうか。日本のレストランでは、午後6時頃には夕食のお客を迎える準備ができています。日本人一般の夕食時間がフランス人に比較して早いからである。ラストオーダーは9時30分ぐらいで、10時に閉まるレストラン

街が多い。しかしフランスでは早くとも午後 7 時 30 分近くにならないとレストランは開かず、そのかわり真夜中すぎまで食事ができる。

レストランに入れば、メニューを正しく読み、料理を選び、注文できなければならない。最後に支払いを済ませることまで、すべてフランスのレストランに特有の〈実践術〉が求められる。アントレ «*entrée*», メイン料理 «*plat principal*», デザート «*dessert*» といった基本的な単語を知っていなければならないだけでなく、コースにそって適切な料理が選べるように、ある程度料理の名前に慣れておくことも必要であろう。

大学生はフランスの代表的郷土料理をどの程度知っているだろうか。パリのあるレストランの広告文 «*La seule vraie bouillabaisse reconnue par les Marseillais*» を読んでもらい、質問に答えてもらった。「マルセイユ人に定評のある唯一の本場ブイヤベース」がこのレストランのお勧めの一品である。「*bouillabaisse*」を知っている学生は、101 人中 61 人いた。しかし他方で 40 人もの学生が有名なマルセイユ料理を知らなかったことになる。同じくパリの東駅近くにあるレストランの広告内容 «*huîtres toute l'année, choucroutes*» について質問したが、「*huîtres*» と «*choucroutes*» の両方を知っていた学生は、101 人中わずか 5 人だけであった。しかもどちらか一つだけでも知っていた学生は 33 人にすぎず、46 人もの学生が何も答えられなかった。

また飲物についての知識はどうであろうか。フランスのカフェのメニューによく見る «*infusion*» という語をどの程度知っているか調べてみた。簡単に言えば «*thé*» の一種ということになるが、具体的には «*une infusion de camomille / menthe / tilleul / verveine*» といったハーブティのことを指す。この «*infusion*» という単語を知っていた学生は 101 人中 4 人だけで、すべて滞仏経験者であった。無解答は 92 人に達した。

次にレストランのメニューにのっている «*kir*» を説明してもらった。ディジョンの名物として有名な «*kir*» は、「*crème de cassis*» を 3 分の 1 入れ、ブルゴーニュ産白ワインのアリゴテ «*aligoté*» を 3 分の 2 ほど入れて作る「食前酒」«*apéritif*» である。ディジョンの市長であった Kir 氏がアペリティブに好んで «*vin blanc cassis*» を飲んでいたので有名になり、「*kir*» の見出し語で *Le Petit Larousse* にのるようになったという逸話がある。この *kir* を正しく説明していた学生は、101 人中 12 人いた。このうち 10 人は滞仏経験者であった。42 人の学生が何も説明できず、17 人の説明が間違っていた。また 17 人の学生は、ただ「アルコール飲料」とだけ説明

し、13人の学生が「アペリティフ」と答えていたものの、この飲物についての具体的な説明がなかった。結局、「アペリティフ」あるいは「食前酒」という語を用いて説明した学生は、25人にすぎなかったことになる。日本の食事にはない「apéritif」の習慣についての知識が充分とはいえない。

ところで「apéritif」は「食前酒」と訳されるが、実際のコミュニケーション場面では、「Qu'est-ce que je vous offre ? Euh... Whisky ? Martini ? Jus de fruits ?」などと尋ねられるように、フルーツジュースの類も「apéritif」の意味内容に含まれている。したがって単に酒類だけを指すものとして「apéritif」を捉えるのは不正確である。

「apéritif」の意味内容はこれだけではない。フランス人家庭に夕食に招待されると、まず「apéritif」をとることから始まる。これには食事の準備が整うまで、あるいは招待客全員がそろうまで談話をするという、一つの約束事としてのコミュニケーション行為が内包されている。

また「Venez prendre l'apéritif à la maison !」と言われた場合、「apéritif」を飲みながら軽く談話をするための招待を意味している。飲物とつまみになるような軽食が用意されているが、夕食は出されない。時間的には夕食の前の時間帯になり、夕食をとる時間には辞去するのが原則である。つまり「apéritif」は一方で、「短い時間ですけど少しお話でもしに来ませんか。」といった内容を伝えることがある。このように「apéritif」という「語」を通して、日本の社会、文化にないフランスに固有の社会的営為を捉えることができる。

日本のレストランにはないサービス料の仕組みも、学生たちが十分に理解しているようには見えなかった。(1) «Service en sus.», (2) «prix net(s)» という表現を与えて、その意味を書いてもらった。(1) については101人中13人が正解で、(2) はわずか5人しか正しい意味を捉えていなかった。無解答が、(1) では43人、(2) では37人いた。間違った解答 ((1) 45人 (2) 50人) の中には、この二つの表現を取り違えて解釈している学生がいた。(2) の «prix net(s)» に関しては、間違った解答をした50人のうち25人が «service non compris» の意味に解釈していた。日本ではレストランのメニューにこのような表現が提示されないため、日本人の学生にとってはこれらの表現に準拠するものがない。そのために単語 «net» を原義で捉え「サービス料も税も入っていない」価格として解釈したのであろう。これはフランス語の単語を原義通りの意味で掴むと、かえって現実

の言葉の世界に入り込めないことを示す例である。「net」という語が«prix net»として使われる時には、表示された定価に何も加算しないという意味であり、したがって「サービス料も税も含まれている」、すなわち«service compris」と同義になる。このように「語」の原義を知っているだけでは、社会的、文化的背景を持ち慣習的かつ日常的に使われている意味内容までも理解することはなかなか難しいことがある。

## b. 店

食生活の違いも日仏で少しずつ変化が見られるようになってきた。日本では昔に比べて肉を多く食するようになったが、フランスでは macrobiotique と呼ばれる穀物、野菜、果物が主体の精進料理的な食事に関心が集まってきているようだ。そうはいっても日本人の伝統的な食事が魚と大豆製品にあれば、フランス人のそれは肉と乳製品にあるということに変わりはないであろう。

こういった食生活の違いは、ある種の食料品店の存在に裏打ちされているのは言うまでもない。パン屋 «boulangerie», チーズ屋 «fromagerie», 肉屋 «boucherie」といった店はフランス人が何を食しているかを語ってくれる。狩猟の獲物の肉 «gibier」などを含めて肉料理の豊富なフランスでは、«boucher» «charcutier» «volailleur」など、肉屋の主人にもそれぞれ専門がある。しかし日本の肉屋にはこのような区別がないためか、日本人の学生はフランスとのこの種の文化の違いに注意を払っていない。豚肉の加工品を専門とする店の名をフランス語で書いてもらったが、«charcuterie」と解答できた学生は101人中わずか5人だけであった。101人中46人までが«boucherie」と解答するだけにとどまった。フランス語教育を通してフランスの文化に触れることも大事な目標であるならば、単に肉屋 = boucherie とだけ学習者に教えているだけではなんらその文化に触れたことにはならない。先に述べたように、豚一匹をすべて食せる術を知っているフランス人であるから、ハム、ベーコン、ソーセージ、サラミ、パテといった豊富な豚肉の加工品を専門とする肉屋があることに不思議はないが、このことは日本人に対して異文化の一面を語っており、«charcuterie»の語が具体的にそれを伝えているのである。

ところで店を話題にすれば、営業日や営業時間が日仏で異なることにも触れておくべきであろう。「Le magasin est ouvert sans interruption.」

という貼紙の内容にどのような文化的要因が隠されているだろうか。日本の店であれば何もこのような貼紙をするまでもなく、原則として終日営業している。あえて「終日営業」と断るのは、フランスでは食料品店などが13時または14時から16時まで店を閉めることが前提になっているからである。つまりこの貼紙は、「昼休みをとらずに営業している」ことを伝えるためなのである。

また「Ouvert le dimanche matin」と書かれた貼紙も、他の店とは異なり、例外的に日曜日の午前中にも営業していることを知らせている。日本では日曜日といえば、個人の店だけでなくデパートやスーパーにとっても書き入れ時であり、この日を閉店にするなど考えられないことであろう。しかしフランスではカトリックの伝統が根強く、日曜日は神に祈るための日であり、安息の日であるから、この日の労働は奨励されない。そのため社員に限らず店員も働かないのが原則である。そのような通例があるなかで、食料品店に限り、午前中の営業が例外的に認められている。この例外的営業をこの貼紙は伝えているのである。

学生にこの貼紙の意味を書いてもらったところ、101人中80人が正しく答えたが、この貼紙の理由を尋ねると、正解は50人に減ってしまった。文化的な内容を読み取れていなかったからである。「Le magasin est ouvert sans interruption」であれ「Ouvert le dimanche matin」であれ、日本の店の習慣にはないフランス社会に固有の仕組みを前提として生まれた表現であるため、たとえこれらが平易なフランス語であっても、そこに隠された文化的な意味内容を掴むことはそれほど易しいことではないのである。

### c. レジャー

レジャーに関しても、日仏でその考え方が異なるようだ。日本人もレジャーとしての休暇を考えるようになりつつあるものの、これを必要かつ当然の権利として捉えているフランス人とは、その実践の仕方がまだまだ同じというわけにはいかない。このことはフランス語の語彙を通して理解できるのではないだろうか。

教育機関が設けている休暇とはほぼ同じ時期に、フランス人一般の休暇も話題になる。9月の新学期を迎えた後、秋になると万聖節「Toussaint」（11月1日休日）、万霊節「jour des Morts」（11月2日）の墓参りの頃に休みがある。暮れの12月下旬には、クリスマス「Noël」の休暇が来る。

家族や親戚とクリスマスパーティー «fête de Noël» を一緒に楽しんだり、知人、友人らと大晦日の晩から一緒に新年を迎える 31 日のパーティー «soirée du réveillon» などのある休暇である。2 月の謝肉祭 «carnaval» «mardi gras» の頃にも休みがあり、この時期にはウインタースポーツに出かける人もいる。春になると復活祭 «Pâques» の頃に休みがあり、そして 7 月になると長い夏休み «vacances d'été» が始まる。

フランス人はこの夏の休暇を 4 週間前後とることができる。そのためか夏のヴァカンスに出かけるのは一年の他の休暇と比べると、同じ出発でもまさに「大出発」«grand départ» になるわけである。またこの長期夏季休暇を 7 月にとる人もいれば 8 月にとる人もいる。前者は «juilletiste» と呼ばれ、後者には «aoûtien(ne)» という名称まである。これらの語は 7 月あるいは 8 月に 4 週間の休暇をとることがそれぞれ定着していることを語っている。

このような休暇の概念に見られる特異性だけでなく、日々の生活においてもフランスは日本と比べてレジャーに開かれた社会と言えよう。例えば、美術館などではフリーパスで入れる時間帯を設けるなどしているが、娯楽の中でも幅広い層に親しまれている映画鑑賞では、日本にはない割引制度がフランスの映画館では採用されている。週刊レジャー案内の映画欄にみる «Lun, tarif unique : 30F» もこの割引制度の一つである。大学院生にこの表現の意味を質問したところ、「月曜日に料金が 30 フランである」ことは掴めたものの（7 人中 6 人）、「unique» の意味を的確に捉えていなかった。「一人につき」とか「特別に」、あるいは「特別料金」、「入場券のみ」といった解釈だけでなく、この語を考慮に入れずに解釈した学生もいた。7 人中 2 人しか «unique» の意味を正しく掴めていなかった。フランスの映画館では、18 歳以下、大学生、高齢者、さらには失業者や多子家庭の観客を対象として平日であれば割引料金が適用される。日本の映画館にはないこの割引システムを知らなければ、ここで使われている «unique» の意味内容を読み取ることは難しいであろう。「毎週月曜日（現在は水曜日だが）は、普段割引料金を適用されていない人も適用されている人と同じに一律 30 フランの料金」（下線筆者）で映画を鑑賞できることを伝えている。これはいつもは割引料金の対象にならない人たちにも割安料金を提供するものである。このような割引制度の導入は、娯楽をより広い層の人たちに解放するものであるが、そこにはまた娯楽を単に商業レベルだけで捉えないフランス人の姿勢が伺える。映画鑑賞を気晴らしのための娯楽と

してだけでなく、観劇や美術館見学などと同じく、文化的な営みとして捉える意識がこの割引制度の裏にはある。映画はそれこそ「文化」の担い手として考えられているのである。

また万人に開かれた芸術・文化としての映画であるなら、より多くの大衆に見てもらわなければならない。外国映画をフランス語のスーパー字幕「Version originale (V.O.)」で上映する映画館がある一方で、外国映画をフランス語への吹き替えで「Version française (V.F.)」で上映する映画館もある。日本では映画館がこのようなシステムをとっていないため、日本人の学生には「V.O.」「V.F.」の意味がほとんどわからず、7人中2人の滞仏経験者を除いて、全員何も答えを書けなかった。映画案内の記事で使われていることがヒントになりそうだが、日本の映画館で実践されていないことを問われているため、日本の社会、文化に準拠するものがなく、解く手掛かりがまったくなかったのである。

#### d. 医療システム

日仏の医療システムの違いは、日本においてここ数年来医薬分業が定着しつつあることで次第に薄れつつある。学生にアンケート調査を行なった当時（1990年12月から1991年1月にかけて）は、まだこの医薬分業システムが日本でほとんど採用されていなかった。そのため6人の大学院生全員が処方薬を記した用紙のことを「ordonnance」とフランス語で答えられなかった。1人の学生がフランス語で「prescription」と解答し、もう1人が日本語で「処方」と書いていたが、他の4人の学生は無解答であった。また処方箋の役割について、「どこで何のために使うものであるか」を尋ねてみた。一カ月の滞仏経験のある学生1人が、「薬局で薬を買うため」（下線筆者）であると説明できたが、1人は無解答で、他の4人は「用意された薬を薬局で受け取る」（同）という解釈であった。日本では医院で処方薬を受け取るために、薬局で買うという発想が学生に生まれなかったであろう。もちろん今日学生に同じような質問をすればもっと正解が多いに違いない。

このように互いの国で文化変容が起きつつある中、同じような社会的〈実践術〉を要求されるようになってきたが、実際にはそれを産み育んできた土壌が異なる以上、何もかも同じように機能していくはずはないであろう。事実、医薬分業という同じシステムを採用しているが、健康保険の機能の仕方は日仏で異なる。日本では医院でも薬局でも総額のうち健康保

険で還付される額との差額を支払えばよい。ところがフランスでは診察料も薬品代も患者がひとまず全額支払うのが原則である。健康保険による還付を受けるには、患者自身が必要書類を添えて社会保障センターに請求しなければならない。この時に医師から渡された処方箋の写しと、医師の署名および診察料の明記された治療明細書 «feuille de soins» が必要になる。薬局はこの治療明細書に処方薬を明記し、印を押すが、患者はそこに処方薬の箱についているシール «vignette» を忘れずに貼付しておかなければ、薬品代は還付されない。

そもそも処方薬を箱単位で買うことも日本と異なる。治療に必要な量以上を買うだけでなく、還付金も箱単位の薬品代に対して計算されるため、無駄が多いことは否めない。しかし薬のパッケージとそこに添えられた説明書きにより、患者はどんな薬を処方され、その薬による副作用や併用してはならない薬は何かなど、自分の受けている治療に関して十分な情報が得られるという利点は見逃せない。「feuille de soins」あるいは «vignette» というシステムは、日本の医療システムにないことであるだけに、日本人学習者はあらかじめ知らされかつ説明されない限り、これらの語の意味を把握することは極めて困難なことであろう。

#### e. 住宅

フランスの不動産案内の記事を読むと、限られたスペースにできるだけ多くの情報を盛り込むため語句や表現を短縮していることが多い。フランス人にはすぐに読み取れる短縮形 *abréviation* であっても、日本人学習者にとってはその解読は時として容易なことではない。

例えば次のような売りマンションの物件案内の内容をどの程度読み取れるだろうか。

14<sup>e</sup>. 79, rue Daguerre.

3 pièces dans immeuble 1900 pierre de taille. 58m<sup>2</sup> + 6m<sup>2</sup> balcon,  
au 5e sans vis-à-vis (ascenseur voté). Calme. Clair. Cave.

Gardiennne. Faibles charges.

この記事に使われている «ascenseur voté» の表現に注意してみよう。フランス人にはすぐにわかるはずだが、果たして日本人の学生はどこまで解読できるだろうか。大学院生であれば «ascenseur» も «voté» もそれぞれ



れの意味に関しては特に問題はないはずである。ところが「エレベーターがついている」(2人)、「6階まで止まらないエレベーター」(1人)といった解答の他は無解答で、結局6人全員が正しく解読できなかった。この«ascenseur voté»を解読するには、辞書に記述されている単語の意味を知っているだけでは不十分なのである。ここでは言葉の背景としてのフランスの社会と文化を捉えていなければならないからである。その背景とは、パリには今でも前世紀からの古い石造りの建物が多くあるが、こういった建物は7階、8階建てであってもエレベーターがついていないままである。そのためこの種の建物でしかも6階に位置するアパートマンを売り出す場合、エレベーターが設置されるとなればそれだけ売りやすくなる。

パリのこういう古い建物の共同所有者の中にはエレベーターの設置を提案する人がいて、共同所有主の集会で議論し、投票によってその是非を決めることになる(下線筆者)。つまり«ascenseur voté»は「エレベーターの設置が投票で可決されている」ことを意味する。この建物にはエレベーターが間もなく設置され、その費用はもとの所有主の負担になっていることをこの二語で伝えているのである。

日本では戦後、集合住宅が次々と建設されたが、5階以上の建物にはエレベーターの設置が義務づけられていたため、エレベーターのない建物は4階建てまでである。共同所有主の集会では、したがってパリの19世紀以来の集合住宅の集会で議論されるようなエレベーター設置という問題を議論し、投票にかけることはない。言い換えれば、「エレベーター設置について投票すること」は、フランスに固有のことであり、「ascenseur voté»は暗黙のうちにコード化されたフランスの社会的、文化的現象を映し出していることになる。「暗黙に了解されていることは一つの共同体の輪郭を描き出し、ある共通体験を浮かび上がらせる。と同時にそれはこの体験を認識できない者たちを象徴的に排除してしまう。」<sup>7)</sup> そのためにフランス人と同じ社会的、文化的体験を持たない日本人にとって、「ascenseur voté」という表現の解読は必然的に難しくなってしまうのである。

以上、フランス語の語彙を通して日本の社会、文化に準拠できないフランスに固有の社会的営為を取り上げ、日本人がこれを捉えることの難しさを述べてきた。フランス人の間で暗黙の了解の上に成り立っている文化的要因 *implicite culturel* を日本人学習者が自ら簡単に読み取れるはずはなく、ここに教育の介入が必要とされるのである。

### 3. コミュニケーションのための異文化要因と語彙学習

「文化的要因はほとんど意識されないままであっても、実際にはコミュニケーション行為の至るところに存在している。文化的な枠は、本質的にコミュニケーションの枠と結びついているものである。」<sup>8)</sup> すでに見てきたように、この文化的な枠とコミュニケーションの枠とを結びつけているのが「語彙」である。日本人学生のフランス語によるコミュニケーション運用能力を検証するにあたって、彼らがこの「語彙」をどの程度修得しているかを調べてきた。

日本人学生はフランス社会におけるコミュニケーション行為にもとめられる〈実践知識〉あるいは〈実践術〉が日本のそれと異なる場合、フランス語の「語」によって伝えられている内容をどうしても母語の文化に準拠して解釈してしまう。それは「判別できない外国の文化事象についての経験上の問いかけは、先験的に母語文化を基準にしてなされる」<sup>9)</sup> からに他ならない。

さらに母語文化にほとんど存在しないフランスに固有の社会的営為について問われれば、思いもよらぬ解釈を引き出したり、あるいはまったく答えられないという現象が起こる。

このような結果がもたらされたのは、外国語であるフランス語を学習しながら、異文化としてのフランスについて学ぶという過程が欠如していたからであろう。このことは、裏を返せば、フランスの異文化としての側面を伝えてくれる「語彙学習」をなおざりにしてきたということである。ある一語のフランス語は、その意味内容を介してフランス人に社会的営為を伝え指示している。しかし日本のフランス語教育における語彙学習は、フランス語のこの意味内容に含まれる文化的特異性に触れるどころか、単に日本語の意味内容に置き換える作業に終始している。日本においては「外国語の学習は、一つ一つの母語の記号からその意味内容を取り出し、それを形は異なるが同じ容量で、等価値とみなされている外国語の記号に埋め込むことであるかのようにすべてが行なわれている。」<sup>10)</sup> このような外国語学習における語彙学習は、「等価値と思われている記号の分布は必ず言語によって異なっており、現実や経験の世界の切り取り方は、言語が異なれば決して同一ではない」<sup>11)</sup> ことを完全に無視して、二言語の記号は同価値であり、その意味内容も同一であり、したがって「外国語の記号 = 母語の記号」という方程式を初めから学習者に提示して、語彙を習得させようとするものである。

問題はこれだけではない。日本人学習者はフランス語の単語の意味を把握する時、そのフランス語と同価値とみなしている日本語の記号に含まれる意味内容を通してそのフランス語を解釈し、フランス語でのコミュニケーションで求められる社会的実践術を捉えてしまう。その結果一つのフランス語を媒介として、日本人が汲み取る実践術とフランス人がフランス語の意味内容から読み取るそれとの間にずれが生じ、これがいわゆる異文化コミュニケーションに固有のずれとなり、互いの意思伝達がスムーズにいかない原因にもなってしまう。これは両者が意味内容を解読する場合によりどころとする社会的、文化的準拠 *référence socioculturelle* が日仏で異なることに起因する。

語彙学習でまず求められるのは、この差異を認識させることである。その上で、フランス語の意味内容に含まれる社会的、文化的要因を明確にし、かつ具体的に〈実践知識〉なり〈実践術〉を把握する形で「語」を理解し、習得することであろう。こうして修得された語彙力こそが社会・文化知識運用能力 *compétence socioculturelle* を形成し、コミュニケーション能力 *compétence de communication* へとつながるものになるのである。

## 結 論

日本人学生の語彙力に焦点を当てて彼らのフランス語運用能力を検証してきた。学生の語彙力が乏しく、そのために十分な言語運用能力 *compétence linguistique* を持ちえていないことは前々稿<sup>12)</sup>で明らかにしたが、今回の検証では、前稿に引き続き、学生がフランスの社会、文化に関する知識を十分に修得していないことを彼らの貧しい語彙力から確認した。このことは、彼らが異文化コミュニケーションを支える社会的、文化的要因を把握していないこと明示するものだが、言語運用能力とは別の視点、すなわち社会・文化知識運用能力のレベルから見ても、彼らのコミュニケーションのためのフランス語運用能力が低いことを裏づける結果となった。これは長年フランス語教育が文法学習を優先させ、語彙の習得に関しては学習者自身に任せるだけで、積極的に取り組んでこなかったことの現れである。コミュニケーション能力の養成を目指すフランス語教育は、この語彙力の獲得を無視しては、期待される成果を望めない。語彙の重要性をコミュニケーションのレベルから再認識し、その習得に質量の両面から取り組むことが、学生のフランス語運用能力の向上に貢献することになるのは

間違いないであろう。

## 註

- 1) «Une langue n'est pas seulement un système formel, un ensemble de réalités abstraites logiquement structurées. Elle est aussi (d'abord, surtout) une pratique sociale, c'est-à-dire non indépendante de ceux qui s'en servent.» L.PORCHER, *La civilisation*, Clé international, 1986, p.33.
- 2) 「日本人学生のフランス語運用能力 —語彙不足の弊害— (その2)」『立教大学フランス文学』No. 24, 1995年, pp.19-32.
- 3) 前稿及び前々稿の場合と同じ学生を対象にしている。
- 4) «Les rues de cette ville [Tokyo] n'ont pas de nom. Il y a bien une adresse écrite, mais elle n'a qu'une valeur postale, elle se réfère à un cadastre (par quartiers et par blocs, nullement géométriques), dont la connaissance est accessible au facteur, non au visiteur : la plus grande ville du monde est pratiquement inclassée, les espèces qui la composent en détail sont innommés. [...] Tokyo nous redit cependant que le rationnel n'est qu'un système parmi d'autres.» R.BARTHES, *L'Empire des signes*, Éditions d'Art Albert Skira, 1970, p.47.
- 5) Idem, pp.48-49.
- 6) «l'organisation semi-fixe de l'espace» E.T.HALL, *La Dimension cachée*, traduction française, Éditions du Seuil, 1971, p.141.
- 7) «L'implicite trace les contours d'une communauté en faisant émerger ce qui relève d'un vécu commun. Dans le même temps, il exclut symboliquement ceux qui ne peuvent s'y reconnaître.» G.ZARATE, *Enseigner une culture étrangère*, Hachette, 1986, p.22.
- 8) «La composante culturelle est en fait partout dans les pratiques communicatives même si son existence reste largement inconsciente. Le cadre culturel est intrinsèquement lié au cadre communicatif.» G.GSCHWIND-HOLTZER, *Analyse sociolinguistique de la communication et didactique*, Hatier-Didier, 1981, p.19.
- 9) «l'interrogation empirique sur des faits culturels étrangers non identifiés se fait a priori à travers les références de la culture maternelle.» G.ZARATE, Ibid, p.27.
- 10) «Tout se passe comme si l'apprentissage d'une langue étrangère consistait à vider chaque signe maternel de son contenu pour en emplir un signe étranger, de forme différente mais de capacité égale, considéré comme équivalent.» R.GALISSON, *Lexicologie et enseignement des langues*, Hachette, 1979, p.174.

- 11) «— que les distributions de signes dits équivalents sont toujours dissemblables de langue à langue : et que le découpage de la réalité et de l'expérience n'est jamais identique dans des langues différentes;» R.GALISSON, Idem, p.174.
- 12) 「日本人学生のフランス語運用能力 —語彙不足の弊害— (その1)」  
『立教大学フランス文学』 No. 23, 1994年, pp.27-51.